

論文審査の要旨

1. 本研究の位置付け

①問題意識の設定とその位置付けが明確

本研究は、日本と中国の20世紀前半の約半世紀にわたる戦争と軍事的大規模紛争の背景に日本人による中国に対する「蔑視」観や「劣等」視する見方があるのではないかという点を問題意識に設定し、多岐にわたる研究素材を同じ視野で分析し続けている。

②日清戦争を日本人の「中国（蔑視・劣等視）」観念の起点に位置付け

日本史研究では、ややもすれば日露戦争を日本帝国主義的アジア侵略の起点とみる見方が一般的であるが、本研究では日清戦争時に既に民衆の間にその観念が醸成されていることを分析し提示している。

③史料を基礎にした分析を行うことを標榜

中国における歴史研究がほとんど理念研究や硬直化した原理・原則論から入る場合が多い。しかし本研究は、中国人留学生として日本における歴史研究の基本的作法を修得し自己の研究に活用し成果を提示している。

2. 本論文の特色と評価

①日本の民衆が受容した当時の「戯画」や「雑誌」に着目し史料として活用

当時大衆が大いに喝采した团团珍聞の「戯画」や日清戦争を速報して大ベストセラーになった『日清戦争実記』を素材に、そのなかに表現された「中国」観を丹念に抽出し分析した結果を評価につなげている。

②日本人の視野だけでなく当時の外国人（ビゴー）が表現する戦争にも着目

明治以降の西洋文化を無批判に受容する日本人を皮肉な目で表現しているビゴーがイギリス大衆新聞に寄稿したデッサンの分析を通じ、外国人の目に映る戦争を丹念な史料収集と調査を基礎に描き出している。

③知識人による「中国」観を検討する際、現地での実地調査を踏まえながら分析

現地での調査などを踏まえながら、日露戦争直後に満鉄肝入りで中国東北地方を旅した夏目と、第一次世界大戦後に現地新聞社の招待により渡中した芥川の視線の差を抽出する作業をしており、中国人留学生ならではの研究手法と研究姿勢が、日本人研究者では不可能な分析を実現させている。

3. その他（申請要件充足の確認）

予備論文審査の時点で2編（査読有り）が提出されていたが、本論文の基礎になる論文として、さらに1編（査読有り）論文が提出されている。

単著「中国を旅した近代日本知識人の眼差しー芥川龍之介の新聞掲載紀行からー」『人間文化』38号、2015年11月、pp.1-23

4. 判定

以上のように本論文は、20世紀前半の日中関係を考える基礎とも言える日本人の中国観について多面的な角度から分析を試みた斬新な論文であり、博士(人間文化学)の学位を授与するに相応しいものと認める。